MOMA Wakayama news

2022 no111

島村逢紅《陽子の像》1939年　個人蔵
「和歌山の近現代美術の精華　第2部　島村逢紅と日本の近代写真」より

保存のはなしをしよう。

21 チャタテムシとわたし

毎年のことですが、雨の季節を前に、湿気とカビに気をつけています。湿気が変動すると、資料の伸び縮みが起こり、物理的に壊れる原因になりますし、カビは菌糸が資料に食い込んで壊す、分泌物でしみをつけるなどの問題を起こします。

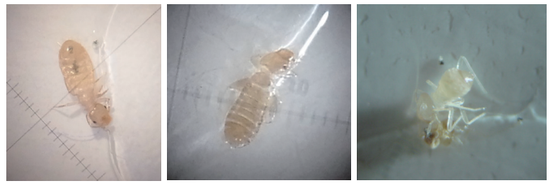
暖かくなって、虫の活動もさかんになってきました。虫にもいろいろいますが、面白いのが、チャタテムシという、目をこらしてやっと見えるくらいの小さな虫です。よく古本のとじ目あたりで、密やかに動いています。おそらくご覧になったことがある方もおられるでしょう。

体が小さいと言うことは、食料が少量で済み、食害の被害はそれほど大きくはなりません。童顔でかわいらしく、個人的には愛着があります。しかもカビを食べる虫なので、そこに生えるカビのありかを示すセンサーの働きが期待できるのです。もっとも、それ以前に作品保存に関わる私たち自身の鼻が「カビくさい」と反応しなければなりません。空気のにおいにはふだんから敏感になっておくよう教えられています。

また、どんなに小柄でも虫は虫、いてもらっては困るのです。死骸がちりと一緒になって湿気をため、カビの栄養にもなるかもしれません。彼らを根絶するには、作品の保存に適さないほどの極端に高温で乾燥した環境をつくるか、ひたすら掃除をするかです。保存空間の問題なら、エタノールで拭いて、除湿機を入れ、送風します。資料なら薬剤を使った燻蒸ののち、ちりを払って清浄な空間へ入れることになります。人体と環境への影響を考えて、薬剤の使用は最低限に抑えています。

掃除について、チャタテムシとおなじくらい小さな豆知識です。高性能な掃除機でなくても、ヘッドで床を勢いよくこするのではなく、ゆっくりと、床のゴミを確実に吸い取っているか目で確かめながら何度もかけると、格段にきれいになります。もうひとつ、普通の水でしぼったぞうきんの威力はあなどれません。お試しください。

（植野比佐見）



チャタテムシ

MUSEUM CALENDAR

開館／9時30分－17時00分（入場は16時30分まで）
休館／毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

2022年度の展覧会

2022.4.9（土）－6.26（日）
モダン・プリンツ
コレクションにみる世界の版画

モダン（近代）という時代にとって、表現としての版画はどのような役割を担ってきたのでしょうか。国内屈指の規模を誇る当館の版画コレクションを中心に紹介します。

ヴァルター・クレム
《スケート場》
1909年　当館蔵

2022.4.29（金・祝）－7.3（日）
コレクション展2022－春夏
特集：生誕130年 田中恭吉

当館のコレクションをテーマごとに紹介するとともに、特集として、今年生誕130年を迎えた田中恭吉の作品をおよそ10年ぶりにまとまって紹介します。

田中恭吉《和歌山風景》
1914年頃　当館蔵

2022.7.5（土）－9.4（日）
なつやすみの美術館12
妻木良三「はじまりの風景」

だれもが気軽に美術館を訪れ、美術の楽しみ方を体験できる展覧会の12回目。今回は、鉛筆などで独自の世界を描き出す和歌山県湯浅町出身の妻木良三さんをゲストに迎え、展覧会を構成します。

妻木良三《ZONE I》
2017–2022年　個人蔵

2022.7.16（土）－9.25（日）
コレクション展2022－夏秋
特集：1960s–1980s
関西の現代美術「再見」

当館が開館した1970年の前後から、関西の近代美術館で現代美術展が数多く開かれました。この時代に制作され当館に集まったコレクションを通して、その現代美術の現場を「再見」します。

森村泰昌
《だぶらかし 肖像C》
1988年　当館蔵

メールマガジン Facebook Twitter　ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ウェブサイトよりご登録いただけます。また Facebook や Twitter でも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

友の会 会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど）
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の頒布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内カフェでの割引
7. ホテルアバローム紀の国、湯処むろべ、和歌山マリーナシティホテルでの割引

TO THE MUSEUM

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。 詳しくは友の会事務局まで。
Tel. 073-436-8690　担当：中川

和歌山県立近代美術館ニュース　No. 111
編集発行：和歌山県立近代美術館　〒640-8137 和歌山市吹上1-4-14
Tel. 073-436-8690　Fax. 073-436-1337　https://www.momaw.jp/
発行日：2022年6月24日　デザイン：中和印刷紙器株式会社・コギト　印刷：白光印刷株式会社

和歌山県立近代美術館

会場風景　1920年代を中心に

会場風景　1930年–40年代

図1 島村逢紅《荻原守衛《女》（新宿・碌山館にて）》1913年　当館蔵（保田龍門旧蔵）

図2 島村逢紅［額縁とヌード（屈む）］1924年　個人蔵

図3 島村逢紅《陽子の像》1939年　個人蔵

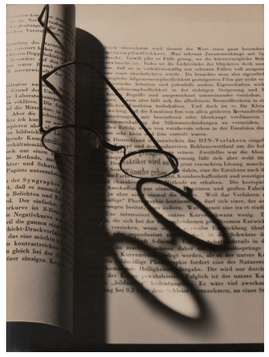


図4 島村逢紅［眼鏡と洋書］1930年代　個人蔵

図5 島村逢紅《鮎》1943年　個人蔵

「和歌山の近現代美術の精華」展　3つのノート

昨年開催した「和歌山の近現代美術の精華」展について、前号の『和歌山県立近代美術館ニュース』No.110では、拙稿「「和歌山の近現代美術の精華」展より」（5頁）において、展覧会の概要をご紹介しました。今号では、出品作家のなかから、島村逢紅（しまむらほうこう）、西村伊作（にしむらいさく）と村井正誠（むらいまさなり）、黒川紀章（くろかわきしょう）、それぞれを担当した学芸員が記したノートをまとめました。

ノート1
「第２部　島村逢紅と日本の近代写真」展示後記

和歌山市で酒造業を営みながら、1910年代から40年代にかけてアマチュア写真家として広く活動した島村逢紅（しまむらほうこう）（本名は安三郎（やすさぶろう）、1890–1944）は、1912（明治45/ 大正元）年に和歌山で結成された写真家団体、木国写友会（もっこくしゃゆうかい）のリーダー的な存在としてその名前は知られていました。東京都写真美術館や横浜美術館、国外ではカナダ国立美術館に作品は所蔵され、『日本写真全集』全12巻（1985–1988）や、東京都写真美術館にて開催された「芸術写真の精華　日本のピクトリアリズム　珠玉の名品展」（2011）など、日本における芸術写真や近代の写真の歴史を振り返る際には、たびたび紹介されてもいます。しかし、これまでその仕事の全体像について知る機会はなく、「和歌山の近現代美術の精華」第2部として開催した本展は、逢紅の足跡を辿る初めての回顧展となりました。

これまでも、逢紅のことは気になりつつ、なかなかきっかけを掴めずにいましたが、今回、島村家の全面的な協力を得て、ようやく本格的な調査を進めることがかないました。島村家住宅（1926年建築、国登録有形文化財）は、幸いにして戦災を免れていたので作品現存への期待はあったのですが、同家から発見された5000点以上の写真プリント、そしてガラス乾板や写真雑誌を含む蔵書、手紙、手帳、撮影のための小道具など大量の資料は、想像を超えるものでした。本展はそれらを元にしながら、逢紅の写真作品約200点を中心に構成したものです。

第1章「島村逢紅」では、「プロローグ：美術をめぐる交友」「1910年代を中心に」「1920年代を中心に」「1930–40年代」のパートによって、絵画を志していた中学時代から、保田龍門（やすだりゅうもん）や荻原守衛（おぎはらもりえ）らとの関係（図1）も追いつつ、逢紅の仕事をおよそ時系列に整理しました。第2章「同時代の写真家たち」では、逢紅と交流のあった写真家、福原信三（ふくはらしんぞう）、福原路草（ふくはらろそう）、野島康三（のじまやすぞう）、安井仲治（やすいなかじ）、渕上白陽（ふちかみはくよう）、そして木国写友会の会員、島村嫩葉（しまむらどんよう）、島村紫陽（しまむらしよう）、江本綾生（えもとあやお）の作品約50点をあわせて紹介しました。

ほぼ初公開となる逢紅の写真作品がどのように捉えられるのか少しの不安もありましたが、展示してみれば、第2章「同時代の写真家たち」で紹介した錚々たる写真家たちと比べてもクオリティ的に決して劣っていないことは明らかでした。逢紅の作風は、風景、ヌード（図2）、人物（図3）、静物（図4、図5）、広告までかなり幅広いものです。またその作風は、明治末から戦前までの活動期間のあいだに、ソフトフォーカスから次第にシャープになり、クローズアップや抽象的な画面構成へと向かいますが、「芸術写真」から「新興写真」へと移行する日本の写真表現の潮流の変化も、逢紅は確実に捉えて制作しています。さらに技術やスタイルの単なる模倣ではなく、それらを吸収しつつ、逢紅独自の写真作品を創造したのだということも、今回の展示では示すことができたのではないかと考えています。

新たな発見に立ち会い、一から展覧会を組み立てていく経験は、学芸員として幸福なことでしたが、2021（令和3）年4月に作品資料が大量に発見されて後、10月に展覧会開催という短期間での、そしてコロナ禍のなかでの準備という厳しい環境での進行でもありました。調査研究の成果は図録にまとめましたが、残された課題も多くあります。

まず、作品の制作年や技法について、雑誌掲載図版や逢紅が記した「撮影記録手帳」などをもとに、今回確定あるいは推定しましたが、こうした基本的な調査は未出品作品も含めて継続する必要があります。残されている逢紅のプリントは、台紙も含めて題名や制作年が記されていないものがほとんどです。

しかしながら、1から17までの番号が附された「撮影記録手帳」が残されていたことは幸いでした。手帳には、1913（大正2）年4月24日から、逝去する1ヶ月前の1944（昭和19）年2月28日までの撮影記録が細かに書き込まれています。2冊目が残念ながら見つかりませんでしたが、16冊の手帳を丁寧に辿ると、逢紅の写真撮影の記録と変遷を追うことができます。例えば、「撮影記録手帳7」（図6）の記述（図7）からは、［額縁とヌード（屈む）］（図2）が、龍門村（現在の和歌山県紀の川市）にあった保田龍門のアトリエにて、1924（大正13）年7月4日に撮影された写真のひとつであることがわかります。

また逢紅は、1910年代に大阪の浪華写真倶楽部（なにわしゃしんくらぶ）や天弓会（てんきゅうかい）、1920代には、神戸の日本光画芸術協会や京都の日本光画協会、東京の写真芸術社などと関係し、1930年代以降は、写真芸術社の日本写真会同人として活躍するという大まかな見取り図は描けますが、その交流や影響関係について明らかになっていない部分が多くあります。木国写友会についても、島村瀞処（しまむらせいしょ）や貴志義一（きしぎいち）といった今回紹介できなかった会員の作品の発掘も進めて、その詳細な活動を追っていかねばなりません。課題は尽きませんが、今後残された資料類の調査整理を進めることで明らかになる事実もあるに違いありません。そして将来的には再びの展覧会開催によって、新たな島村逢紅像を提示することができればと思います。

（奥村一郎）

図6「撮影記録手帳7」（1924年3月30日～10月9日）

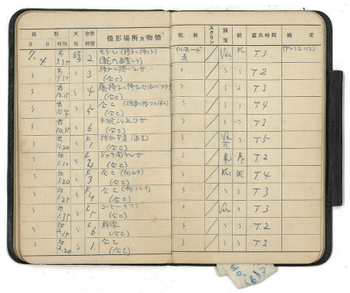


図7「撮影記録手帳7」、1924年7月4日、保田龍門アトリエでの撮影についての記録

図1 石井柏亭《滞船》1913年　当館蔵

図2 西村伊作《新宮風景》1913年　西村山林株式会社蔵

ノート2

新宮というところで。 ―西村伊作の気配

ひとりの人間がそこにいるということで、何人もの人の未来に働きかけていることがあります。いまから130年近く前の1884（明治17）年、和歌山県の南部にあるいまの新宮市に生まれた西村伊作もそのような人でした。

伊作は7歳のとき、濃尾地震で新宮教会の草創期に力を尽くしたクリスチャンだった両親を失い、奈良県下北山村で林業を営んでいた母方の祖母、西村もんの養子となりました。そして父方の祖父母やアメリカで医学を学び、新宮へ帰ってきた父の弟、大石誠之助のもとで暮らすことになりました。

のちに大逆事件に連座したとして刑死した誠之助は、新宮に医院を開くだけでなく、街の人たちのためにさまざまな新聞や雑誌を読める「新聞雑誌縦覧所」、健康的な娯楽を提案する「太平洋食堂」などを設け、故郷の人々の生活の質を上げようとしていました。いまではそれらの施設は残っていませんが、たとえば詩人で小説家の佐藤春夫の著作にその息吹が伝えられています。1892（明治25）年生まれの春夫は、新宮市にあった「新聞雑誌縦覧所」に通い、誠之助らが持ち寄った雑誌や新聞を読み、なによりそこに展示された伊作の水彩画から強い印象を受けたことを、次のように回想しています。

> 自分は学校の帰り途をいつも新聞雑誌閲覧所の方にして、ここに立寄つては竹久夢二の平民新聞や「火鞭」その他その類の小雑誌に雑つていた反省社の中央公論などを見た。小雑誌の名前は生憎とおぼえてもいないのに、閲覧室の壁に掲げられてゐた西村伊作の月夜の郊外らしい風景や読書してゐる西洋婦人の水彩画などをよくおぼえている。＊1

伊作の水彩画は、1901（明治34）年、広島の中学校で学んでいたとき、大下藤次郎の『水彩画之栞』を得て描き始められたものです。こののち絵画への関心を深めて油彩画も手がけるようになり、画家の石井柏亭を新宮へ招いてともに制作しました。フォービスムやキュビスムの日本への紹介でも知られる柏亭は、フランスから帰ってきたばかりでした。柏亭は伊作の家に滞在し、《滞船》（図1）や、伊作の家族の肖像《N氏と其の一家》を描いています。

このころの伊作は多くの風景写生を残しており、「和歌山の近現代美術の精華」展で紹介した油彩画《新宮風景》（図2）と《下北山風景》（図3）は、そのなかでも特に力の入った作品です。しっかりとした写実に基づいた、伊作の絵画作品のなかでも代表的なものと言えるでしょう。伊作の絵は、「誠意をもって正直にすれば、それがまずくてもその正しさというものは残っており、自然を見て絵を描くと、その誠実さによって幼稚な絵が美しく、そしていいものに感じられる」＊2という絵画について語った言葉が示すとおりの作風をもっています。

伊作がさかんに街中で風景写生を行っていた当時、その伊作の様子を遠くからじっと見ている少年が新宮にいました。村井正誠です。村井は1908（明治38）年岐阜県の大垣に生まれ、医師だった父の仕事のために移り住んだ和歌山県の新宮で育ちました。新宮へ来たのは1913（大正2）年9月、8歳のときでした。

「街の角に立って、向こうの景色を見ながら画架を立てて、こう絵具をつけて描くんです」＊3という伊作の姿は、村井にとって目が離せない魅力を放っていました。キャンバスの上に目の前の風景が写し取られていくさまは、きっと魔法のように感じられたでしょう。

村井は、伊作と年の近い春夫のように親しく交流することはできませんでしたが、この時期に新宮に移り住んでいたのは、幸運なことでした。伊作は、1914（大正3）年に東京の日比谷美術館で個展「西村伊作作品一人展覧会」を開くほど多作だったのですが、しばらくするとより実用に即し、生活に根ざした創作と考える陶芸へと向かいました。さらに『楽しき住家』（図4）をはじめとする著作によって、新しい生活の提言者、建築家としても知られるようになっていき、あまり絵を描かなくなっていったからです。しかし、いずれにしても「消費的な遊びではなく、ものをつくることの遊び」＊4を愉しむ、伊作のような大人が身近にいたことに大きな意味がありました。

そして、伊作の風景写生との遭遇は、村井が生涯描き続けた油絵（図5）との出会いでもありました。キャンバスに油絵具で描くと、水彩とは異なる粘りと強さ、艶が画面にもたらされることが村井にとって大きな魅力だったのです。後年、乾いた絵肌を得るために絵具から油を新聞紙などで吸い取ることが流行したときも、村井の描く画面は油絵具の特性を尊重するものでしたし、戦後一般的になったアクリル絵具もその代わりにはしませんでした。

図3 西村伊作《下北山風景》大正初年頃　個人蔵

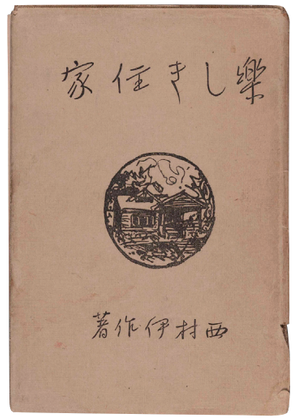


図4 西村伊作『楽しき住家』第4版、警醒社、1920年

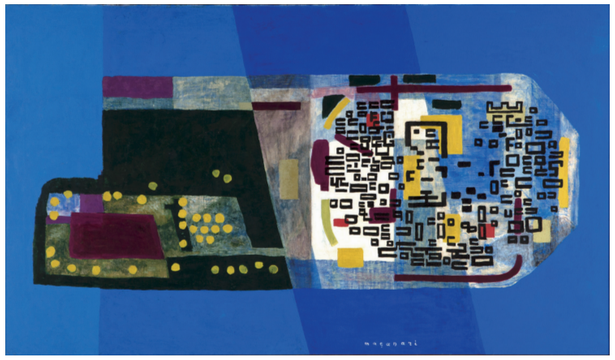


図5 村井正誠《URBAIN No.1》1936年　当館蔵

図6 旧西村家住宅（西村伊作記念館）

村井が伊作の油絵に魅了された当時、新宮では油絵具を売っていなかったため、父の医院にあった傷薬の油で作ろうとしたそうです。その油は空気中の酸素と結びついて堅くなる乾性油ではなかったため、いつまでもべたべたしているばかりだったとご本人よりうかがいましたが、ひとりの小学生が絵具を自製するほど夢中にさせたのは、伊作の姿から伝わる熱があってのことでしょう。

伊作は1963（昭和38）年に亡くなりました。新宮の風景も変わりましたが、その面影をしのぶことのできる場所が残されています。伊作が設計し、1914（大正3）年に竣工した自邸の周辺です。現在、自邸は保存修復工事も済んで「西村伊作記念館」（図6）として公開されており、斜め向かいにある宣教師のために伊作が設計した「旧チャップマン邸」とともに、この一帯に瀟洒な雰囲気を醸し出しています。

下北山村の住宅を思わせる美しい石垣と屋根の意匠を持つ伊作の自邸は、玄関を入って右、南側に家族のための食堂と居間が設けられ、ホールを隔てて反対側に伊作の事務所があります。来客のための客間ではなく、家族のための居間を家の中心とすることは、当時画期的なことでした。2階には家族それぞれの私室がおかれ、浴室も2階です。100年以上も前に建てられたこの家にはまだ一般的ではなかったセントラルヒーティングや水洗トイレも工夫され、その創意には驚かされます。

ここで伊作は創作にいそしみ、本を書き、理想とする生活を実現していきました。伊作が求めた生活は、常識や体裁にとらわれず、自由に、創造性豊かに生きることでした。それを家族と共有したいという思いをこめてこの住みかは作られています。それまでに作った二つの自邸での試みとともに、建築の経緯をまとめた『楽しき住家』（図4）は版を重ね、続編や改版も出版され、伊作の住まいに関する考え、暮らし方の提案に共感する人々を得ていきました。その結果が西村建築事務所の活動であり、文化学院の創立へと展開していくことになります。

新宮には伊作の大切な原点が残されています。少年だった村井が伊作ととくに親しく話すことがなくても、絵を描く姿を見るだけで心に響くものを受け取ったように、機会があればこの場所を訪れて、伊作の気配を感じていただくことをお勧めします。この場所は、私たちにも何かを伝えてくれるでしょう。

（植野比佐見）

＊1　佐藤春夫『青春期の自画像』共立書房、1948年8月1日、13頁
＊2　西村伊作『我に益あり：西村伊作自伝』紀元社、1960年、271頁
＊3　村井正誠談「作家のはなし」『和歌山県立近代美術館ニュース』No.6、1995年9月、1頁
＊4　西村前掲書、271頁

図1 中銀カプセルタワービル　1972年（撮影は2021年）

図2 中銀カプセルタワービルの内部（撮影は2021年）

図3 和歌山県立近代美術館・博物館の外観　1994年

図11 愛媛県総合科学博物館　1994年（撮影は2021年）

図4～10 和歌山県立近代美術館のための打合せ図とスケッチ

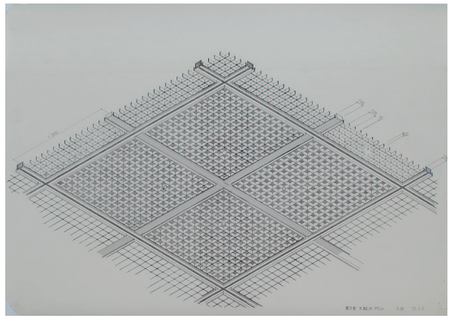


図4 打合せ図のひとつ　展示室の天井

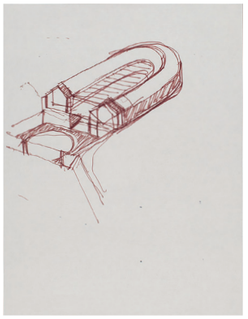


図5 1990年6月3日付　最初のスケッチ

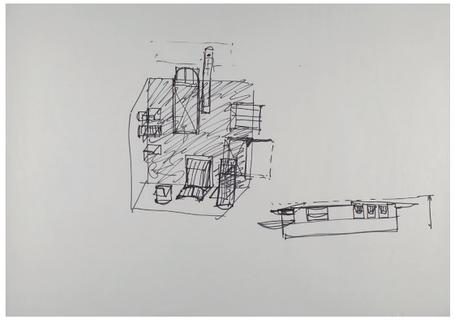


図6 1990年7月16日付　重要なスケッチ

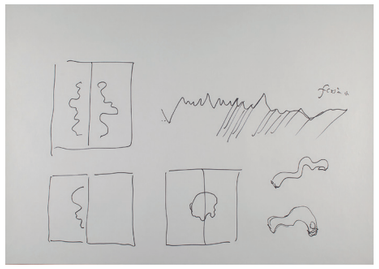


図7 1993年8月30日付　フラクタル曲線のドアハンドル・ドアノブのスケッチ

図8 1993年4月8日付のスケッチ

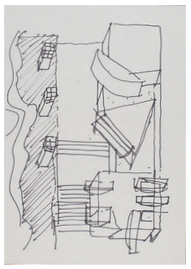


図9 1993年4月8日付のスケッチ

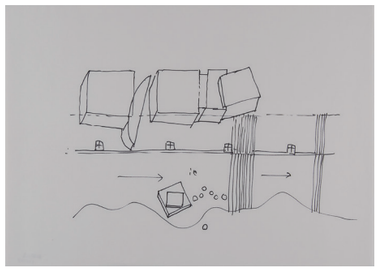


図10 1993年5月3日付のスケッチ

ノート3

黒川紀章のスケッチ

世界的な建築家、黒川紀章（くろかわきしょう）。今年4月から初期の代表作「中銀カプセルタワービル」（図1・2）の解体が始まり、非常に惜しまれながらもあらためて注目されている感がある。2007年に亡くなったが、なお多くの建築が世界中にあり進行中の都市計画もある。その建築は、人間が生きる場を独自の理念に基づいてあらたに創出しようとする試みだった。新陳代謝（メタボリズム）によって建築や都市が生物の細胞のように循環と結合、再生を繰り返しながら持続するという1960年代の理念から、自然や歴史と対峙しつつ共生するという1990年代の理念へと、透徹した思想はより普遍的なものになり、当初から国土計画にも及んでいた。そうしたなかで1990年代初頭に手がけられた和歌山県立近代美術館・博物館（図3）は、「共生」を明確に打ち出した黒川の代表作のひとつといえよう。

現代の美術を支え、生み出す場ともなる近代美術館の計画にあたり、黒川がどんな思想をこの建築に託したか。「和歌山の近現代美術の精華」展で紹介できればと、黒川紀章建築都市設計事務所の協力のもと、スケッチをはじめ、図面、写真、新聞雑誌などを調査し、展示する機会を得た。調査では「和歌山県立近代美術館・博物館」「ICビル」「吉備町庁舎」「華岡青洲の里」といった和歌山県内にある建築と、当館で階段の手すりなどに用いられている曲線「フラクタル」、そして「第二国土軸」に関するものをと希望したところ、倉庫から文書保存箱や図面を収めた筒など42個口の資料群が集められ、2021年6月29日から5日間ではあったが、それらを集中的に見せていただいた。助言、協力くださいました関係者の皆様に、まずここでお礼を申し上げます。

調査のなかで圧巻だったのは、「打合せ図」と呼ばれる何百枚もの図面だった。配置計画からエレベーターのボタンまで、あらゆる箇所の床から見上げたり天井から見下ろしたりしたところを描いたアクソメ図が保管されている（図4）。トレーシングペーパーに描かれた原図とコピーがあり、コピーにはさらに鉛筆などで陰影が加筆されている。一見すれば大変な労力を投入したことが分かるそれらの精緻な図面は、スタッフが黒川の打ち合わせのために作成したものと聞いてあらためて驚いた。当時200人近いスタッフを抱え、いくつものプロジェクトを同時進行させていた黒川にとって、週1回程度のプロジェクトごとのミーティングがその建築について集中して考えるための時間だった。和歌山県立近代美術館・博物館の場合は建築7～8名、構造と設備で1名ずつの計10人程度が担当し、ミーティングは東京の青山にあった事務所の神宮外苑を見下ろす見晴らしの良い会議室で行われた。毎回、壁一面に打合せ図が貼り出され、机上に模型が置かれ、黒川はいつもの位置に愛用のA2版スケッチブックとサインペンを前に座り、その周りを取り囲むようにチームのメンバーが直立不動で立ち並んだという。貼り出すには原図だと壁が透けるので、コピーが必要だったのだ。ひとつの建築のためにどれほど細部までイメージし尽くされていたかがよくわかる。

いっぽう、黒川のスケッチはプロジェクトごとにクリアファイルにまとめられ、保管されている。便箋や小さなノートに細いペンで描かれたものや、A2サイズのスケッチブックにサインペンで描かれたもの、B5サイズのものも多い。それぞれの裏面には片隅に鉛筆で「和歌山県立近代美術館900603」というようにプロジェクト名と日付が記されている。見ていると、自宅などさまざまな場面で考えながら描かれたと思われるものと、ミーティングの際に描かれたものとがあるのが分かってくる。ミーティングでのスケッチはとにかく速描きで、いかに端的に意図を伝えるかが最優先されている。ミーティングで示されたスケッチは、その日のうちにコピーしてスタッフに渡され、オリジナルは黒川に関する資料を整理する専門スタッフが裏面に日付を記入し、大切に整理保管された。裏面に書かれた日付は担当者に渡された日付なので、ミーティングから1～2日後の日付になっているという。保存性に優れた中性紙に描かれているのを見ると、それが重要なものになると予見されていたことも窺え、黒川の生前はそのオリジナルが外に出ることはなかった（展覧会でコピーを床に敷き詰めたりはしている）。

和歌山のプロジェクトを担当した吉田行雄氏が「和歌山、やるぞ」と最初に渡されたというスケッチ（図5）の日付が1990年6月3日。吉田氏が「重要なスケッチ」と示唆するその後のスケッチ（図6）が「900716」である。ミーティングで、「突然、キュッキュ、キュッキュと、描きだした」のだという。建物を上から見た図と横から見た図だが、「やるぞ」と始まってからおよそ1か月で庇が特長的な今の美術館の形が生まれている。その間に、当時の学芸員や顧問だった大原美術館長・藤田慎一郎氏から、美術館建築についての基本的な考え方（展示室内に外光を入れない、展示室の壁面はまっすぐな平面に、など）が示されていた。諸条件のもと黒川が思考をめぐらし集中していた姿が浮かんで来る。

全体で60枚ほどのスケッチが残されているが、調査できたなかでは1993年8月30日付のフラクタル曲線のドアハンドルのスケッチ（図7）が最後だった。美術館の竣工は1994年3月なので、ギリギリまで検討が続けられていたということになろうか。しかし、1993年4月8日付のスケッチ（図8、9）や5月3日付のスケッチ（図10）はどういうことなのだろう。能舞台のある池や手前の方形の建物、奥の曲面のある建物は確かに和歌山県立近代美術館・博物館のようだが、あいだに三角形の建物があったり、美術館の形が芋虫のように連続した方形になっていたりする。その頃の工事現場の写真を見ると、当然ながら躯体はもう出来ている。そんな時になおもこうした現実にはあり得ないスケッチを、黒川が描き続けていたことにまた驚く。そしてそのアイデアは愛媛県総合科学博物館（図11）などに連綿と続いているようだ。スケッチから、思考を止めることなく駆け抜けるように進み続けた黒川紀章の建築家としての姿が伝わってくる。

（井上芳子）